

「田園調布学園大学大学院共同研究助成報告書」

研究題目

視覚障害を有する子どもたちの芸術理解の支援

研究代表者

共同研究者

生田 久美子

中原 篤徳

【研究の背景】

申請者はこれまで、国内外の視覚障がい者を対象とする支援事業に関わり、その教育実践がもつ意義や教育的効果について考察を続けてきた。なかでも特に着目したのは、イタリアのボローニャ市にあるアンテロス美術館での教育実践である。そこでは、視覚障がいを持つ人々に対して「触覚」を通して「知」を伝達する実践が行われている。その際に媒介となっているのが「芸術作品」であった。こうした「芸術理解」を通じた教育実践は、たんに視覚障がいを持つ人々への特別支援教育の提供という文脈に収まるものではない。むしろ、五感を通じた「知」の伝達、「アート」を通じた教育実践の可能性といった、より広い文脈における調査・分析を必要とするものと考えられる。

【研究目的】

申請者は、これまで、研究代表者の生田及び研究分担者の中原は、日本とイタリアにおける視覚障害者（児）の芸術理解の支援に関する実践の調査を実施してきた。研究成果の一部は報告書にまとめたが、本研究のさらなる展開のためには継続的な調査が必須であり、今回申請する研究の目的も視覚障害者（児）の芸術理解の支援に関する研究とする。本研究の意義は、障害者（児）の芸術理解の支援に資するのみならず、「子どもを人間としてみる」という新たな子ども観、人間観を提示することにある。以上の目的を踏まえ本研究の具体的な目標は以下の3点である。

- (1) 「触覚」や「芸術理解」を通じた教育実践の実情、特徴を明らかにする
- (2) 「触覚」や「芸術理解」を通じた教育実践が視覚障がいをもつ人々に対してもたらす教育効果を考察する
- (3) 「触覚」や「芸術理解」を通じた教育実践が健常児等のより広い教育実践に示唆する意義の分析する

【研究方法】

本研究の方法は以下の通りである。

第一に、国内外の視覚障がい者を対象とする芸術理解に向けた実践の調査（施設の訪問・関係者へのインタビュー）を実施する。第二に、先行研究及びこれまでに継続して行ってきた調査の分析結果に基づき、調査対象が持つ特徴、意義、課題等を明らかにする。第三に、調査結果分析及び考察が提示する可能性や課題を明らかにする。

全体の過程を通して、これまでに継続してきた視覚障がい者への特別支援教育の分析を前進させ、より広い文脈における意義を明らかにすることをもって結論とする。

【研究結果】

本研究の研究結果は以下の通りである。

①国内における調査として、岩手県盛岡市にある「桜井記念 視覚障がい者のための手でみる博物館」を訪問調査し、館長である川俣若菜氏を交えての研究会を実施した。同博物館はその名の通り、視覚に障がいを持つの方のための、全て手でさわって『みる』ことのできる施設である。博物館内には動物のはく製、建物の模型、民族楽器等のさまざまな事物が陳列されている。来館者は、それに実際に「触れる」ことを通して、対象物を「見る」ことができるのである。川俣氏によれば、視覚障がいを持つ人にとっては、触る順番、触る部分などの小さな要素の違いで、認識に大きな差異が生まれるという。そのため、ただ物を陳列しておくだけではなく、触る順番や触り方についての詳細なガイドが必要となる。そして、それらのガイド（つまり、言葉）と触っている事物（つまり、触覚）とのつながりが上手く結合された時に、視覚障がいをもつ人は新しい概念や世界を獲得することが出来るのである。

(研究結果つづき)

このことは、通常は視覚を通して世界の事物を認識している普通教育の中の実践に対しても同様のことが言える。ただ見るだけ、触るだけではなく、そこに「言葉」という媒介（つまり、教育的な働きかけ）が加わって初めて、学習者たちは、事物を概念として経験化していくことが出来ると考えられるのである。

また、研究会では、新たな教育実践についての模索も論じられた。生田は、子どもたちに粘土を与えることで、視覚障がいを持った子どもたちが、どのような造形を行うのか、そこから彼・彼女らがどのような認識をもっているのかを知ることができるのではないかと提案を行った。この試みの提案は、単に認識の確認作業としてだけではなく、視覚障がいをもつ子どもたちの「創作」過程に対する洞察にも結び付く。それは、広い意味での「芸術理解」にほかならず、極めて、知的かつ高度な過程の経験として提示する可能性をもっている。

最後に、川俣氏から、視覚障がいをもつ人々と、そうでない人々との「見る」「触れる」という経験には大きな差異があるが、それは本質的なへだたりではなく、むしろ「異文化交流」の文脈において捉えられるという指摘がなされた。つまり、いずれかの優劣を前提とするのではなく、それぞれが特徴ある認識や創造のプロセスであり、その際に五感や芸術理解が媒介をなすということである。こうした知見を得られたことで、これまで実施してきた視覚障害者（児）の芸術理解の支援に関する研究を一層前進させることができた。

②研究協力者である中原氏は、視覚障がいをもつ人々に対する芸術理解を促進するための媒介となる芸術作品の作成にとりくみ、製作活動を行った。

【考察および今後の課題】

本研究の結果をふまえ、考察としては以下の2点が挙げられる。

①視覚障害を有する子どもたちにとっては「触覚」等の五感を通じた教育実践、支援がもつ効果が極めて大きく、そのためには媒介となる事物（芸術作品を含む）に加えて、教授者の働きかけが不可欠であることが明らかとなった。

②視覚障害を有する子どもたちにとっての芸術理解、及び五感を通じた支援は、視覚障がいをもたない子どもたちがもつ認識や概念形成のプロセスについても大きな示唆を与えることを提示した。

以上の考察を踏まえて、本研究の今後の課題は以下の通りである。

①国内外における視覚障がいをもつ子どもを対象とする支援、教育実践を対象とする調査をより広範に、精緻に実施し、そのモデル化を進めること

②芸術理解や五感を通しての教育実践がもつ効果の検証と理論家をさらに進めること